

特別支援学校に在籍する子どもの母親のしつけの悩み

MOTHERS' WORRIES FOR HOME TRAINING
OF THEIR HANDICAPPED CHILDREN

山地亜希* 白坂真紀* 桑田弘美* 坂本 裕**

A. Yamaji, M. Shirasaka, H. Kuwata and Y. Sakamoto

要旨：本研究は、特別支援学校に在籍する子どもの母親のしつけの悩みを明らかにすることを目的に、A県内の特別支援学校小学部に在籍する子どもの母親454人に自記式質問紙による調査を実施した。質問項目のうち「子どものしつけに悩む」の内容について自由記載されたものを質的記述的に分析したところ、65のコードより、5つのカテゴリー《しつけの困難感》、《しつけの逆効果》、《しつけへの困惑》、《しつけへの葛藤》、《しつけへの疑念》と15のサブカテゴリーを抽出した。障がいのある子どもを持つ母親は、コミュニケーションがとれないことでしつけへの無力感を感じたり、わがままが障がいに由来するものであるのかわからないと感じたりしている。しつけそのものの困難さと逆効果の出現が、しつけに対する困惑や葛藤につながり、また障がいのある子どもにもしつけをするべきかどうか悩むことにつながっていると考えられた。

キーワード：しつけ・障がい児・母親

I はじめに

しつけとは、子どもが基本的な生活習慣や物事の価値観を身につけるために、態度や言葉でもって教えることであり、家庭の中で自然に伝わる生活文化とも言われている¹⁾。

しつけに関する悩みは存在するものと考えられるが、障がいのある子どもを育てる親は、コミュニケーションや意思疎通の困難さや子どもの行動が周囲に理解されない経験等から、より深い悩みを持っていることが想像できる。

しかし、障がいのある子どものしつけに関して研究された論文はほとんど見当たらず、その悩みの内容を明らかにしたものはみられない。そこで、障がいのある子どもの母親のしつけに関する悩みについて調査したことを報告する。

II 研究目的

本研究の目的は、特別支援学校小学部に在籍する子どもを持つ母親のしつけに関する悩みを明らかにすることである。

III 用語の操作的定義

しつけ：子どもが基本的な生活習慣や物事の価値観を身につけるために、家族の皆が協力して態度

* 滋賀医科大学医学部

** 岐阜大学大学院教育学研究科

や言葉で教えること。

IV 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究。

2. 研究対象

A県内の特別支援学校小学部に在籍する子どもの母親454人。

3. 研究期間

2008年9月～2011年5月。

4. データ収集方法

特別支援学校小学部に在籍する子どもの母親454人に自記式質問紙を配布し、記入後、回収した。質問紙の内容は、障がいや難病のある子どもの健康面へのケアについてであり、今回はその中の「子どものしつけに悩む」の自由記載を取り上げたものである。

5. データ分析方法

「子どものしつけに悩む」の内容について自由記載されたものをもとに、コード化、サブカテゴリー化し、カテゴリーに分類した。

6. 倫理的配慮

滋賀医科大学倫理委員会に研究の承認を得たのち、実施した。研究対象施設、対象者に対しては、研究の目的・意義・方法・参加は自由意思であること・自記式質問紙の返送をもって本研究への同意とみなす旨を文書にて説明した。

V 結果

1. 質問紙回収・回答率

454人に質問紙を配布し、回収数は303部、回収率は66.7%であった。そのうち有効回答は291部、有効回答率は96%であった。

2. 対象者の属性

性別は男児220人 (75.6%)・女児71人 (24.4%) であった。

学校の種別は知的障害145人 (49.8%)・肢体不自由37人 (12.7%)・病弱14人 (4.8%)・知的障害・肢体不自由併設95人 (32.6%) であった。

3. 分析結果

得られたデータをもとに分析を行った結果、65のコードより、5つのカテゴリーと15のサブカテゴリーを抽出した (表1)。

表1 特別支援学校に在籍する子どもの母親のしつけの悩み

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
しつけの困難感	試行錯誤するしつけ	無理強いをしてよいのかわからない 将来的に必要なしつけがわからない 善し悪しの伝え方を試行錯誤している 叱るタイミングがわからない 良いしつけの方法を知りたい 注意の方法がわからない 社会のルールをどのように身につせればよいか わからない どのように教えるとよいかかわからない どのようにしつけをしてよいかかわからない マナーをどのように教えたらよいかかわからない
	教えることへの困難感	教えてもわかってもらえない 清潔不潔の区別を教えることは難しい 不潔な行為をやめさせられない 命の大切さを十分に教えられない マナーを教えてもわかってもらえない 親の命令には従わないが、教師には従う 母親の命令には従わない 羞恥心を教えることが難しい
	しつけへの疲労感	教えることは疲れる しつけをすることが面倒になる
	一貫性を持ったしつけが困難	一貫したしつけができていない 外出時に叱れないとき、子どもの機嫌をとってしまう 毎日同じことを繰り返し説明することに苦勞する 思わず甘やかしてしまう
しつけの逆効果	しつけの反動に狼狽	子どもは泣けばなんとかなると思っている 高圧的な言い方をすると、子どもが情緒不安定になる 子どもが望ましくないことを喜んでする 注意すると、子どもが逆切れする 子どものペースが遅い 子どもの衝動性についていけない 指示なしで動くことができない 人の物と自分のものとの区別がつかない
	指示に従わない時に過剰に叱責	繰り返し注意しても従わないときは、叩いてしまう 注意する時には感情的になってしまう 教えてできないと叱ってしまう 思わずたたいてしまうことがある 繰り返し教えてもできないとき、叱ってしまう 親の感情をそのままぶつけてしまう事がある 叱ることより怒ることが多い
しつけへの困惑	きょうだいとのしつけ方の違いへの困惑	他のきょうだいと同じように叱ってよいのかわからない 障がいのある子を優先すると、他のきょうだいにはひいきに見える きょうだいへの対応が難しい

	しつけの真意が正しく伝わらないことへの危惧	知的障害のために正しく伝わらない 子どもが言葉の意味を理解できない 子どもにとっては、叱られているだけかもしれない 子どもは何を注意されたかわからない 子どもは叱られてもわからない
	理想と現実とのギャップを実感	将来の目標について悩む 理想どおりにしつけられない 自立を目指すと思い通りにならない
	子どもが周囲に理解されないことへの戸惑い	家庭と社会で許される行動が違う 子どもの行動が周りに理解されない 学校で頑張っている分家庭では甘えさせてやりたいが葛藤する
	しつけが不十分と評価されることへの憤り	しつけているつもりであるが、周りの人にはしつけていないように思われる 自制できていない姿を見ると、しつけができていないのかと悩む
しつけへの葛藤	子どもに我慢させることへの葛藤	子どもの癖をやめさせるべきか悩む どこまで我慢させてよいかかわからない 全介助の子どもに我慢させてよいかかわからない
	子どもの能力としての判断が困難	わがママが障害に由来するものなのかわからない 子どもの能力として、可能か不可能かの判断が難しい
	意思の疎通がはかれないことへの無力感	コミュニケーションがとれない 親の言葉が伝わらない 意思の疎通ができないのでしつけはできない
しつけへの疑念	しつけの必要性に対する疑問	知的障害の子どもにしつけが必要なかわからない 子どもの立場に立って考える事が難しい

VI 考察

1. しつけの困難感

母親たちはしつけをしようと試みるものの、言葉が伝わらなかったり、意思疎通が取れなかったりする障がいによるコミュニケーションの取りにくさにより、「教えてもわかってももらえない」と感じている。「清潔不潔の区別」「命の大切さ」「マナー」「羞恥心」など、具体的なことが伝わりにくいようであった。

どこまで「無理強いをしてよいのか」、「どのように教えるとよいか」と、その方法について常に試行錯誤しており、繰り返し説明してもなかなか子どもに理解されないことで、苦労や疲労感につながっている。「良いしつけの方法を知りたい」と願い、ルールやマナーの教え方について困っていた。

教えてもなかなかかわかってもらえないという状況から、苛立ちや無力感を感じ、諦める気持ちやしつけそのものの必要性への疑問へつながっていくのではないかと考えられるが、逆にそのような状況においては、わが子を社会で通用する人に育てたいと力も入る²⁾と述べられており、理想と現実とのギャップが、しつけへの困難感をさらに助長していることも考えられた。

2. しつけの逆効果

「子どもが望ましくないことを喜んでする」「注意すると、子どもが逆切れする」「子どもが情緒不安定になる」など、しつけをしても、そのことが思わしくない結果につながっていることがあり、母親は焦りや戸惑いを感じている。

「子どものペースが遅い」「子どもの衝動性についていけない」など、障がいのある子ども個人個人の特性による悩みも存在し、しつけをすることでそのことが浮き彫りになる経験をしているのではないかと思われた。具体的には、指示なしで動くことができなかつたり、急に飛び出すなどの衝動的な行動をしたりすることが挙げられていたが、説明しても伝わらず何度も同じ行動が続くと、できないことが母親の中で強調され、思いどおりに育たないときのあせり⁹⁾につながっていくと考えられた。

また、子どもが指示に従わないとき、母親自身が感情的になってしまい、思わずたたいたり、怒ったりしてしまうことは障がいのある子どもに限ったことではないと思われるが、「繰り返し教えてもできない」などの状態が、さらに母親にストレスとなり、「叱ることより怒ることが多い」という状況になっており、効果的なしつけにつながらないと感じているようであった。

このように、母親にとって、しつけをしてもその反動で良くない結果をきたすと感じられることも多く存在すると考えられ、しつけの真意が子どもに伝わらないことに苦労していた。

3. しつけへの困惑

障がいのある子ども以外に、きょうだいが存在する場合、「他のきょうだいと同じように叱ってよいかわからない」「障がいのある子を優先すると、他のきょうだいにはひいきに見える」「きょうだいへの対応が難しい」など、同じことをしているのにきょうだいだけ叱ると、障がいのある子どもを特別扱いし、自分だけが叱られているようにきょうだいには感じられてしまう。しかし、障がいのある子どもをきょうだいと同じように叱っても効果的ではない、仕方がないという思いもあると考えられ、きょうだいとのしつけ方の違いやそのことできょうだいどう思うかについて、母親は悩んでいる。

それは「知的障害のために正しく伝わらない」「子どもが言葉の意味を理解できない」「子どもにとっては、叱られているだけかもしれない」「子どもは何を注意されたかわからない」ということにもつながり、母親はしつけを心がけているつもりでも、子どもにとっては理解しがたいことであり、本当に伝えたいことは伝わっていないのではないかと危惧していると思われた。

また、社会の中では、子ども特有の行動やこだわりがある場合や自制ができない場合など、「子どもの行動が周りに理解されない」ことや、「しつけているつもりであるが、周りの人にはしつけていないように思われる」ことで、母親は周囲の人々に対し、誤解をされているのではないかと戸惑い、しつけが不十分と評価されることへの憤りを感じていた。奇異に見える子どもの行動にも子どもなりの理由があることを周囲に伝える、わが子ができないことは恥ずかしがらずに堂々と周囲に協力を求める、そうした積み重ねがあって初めて、“非難の視線”は“温かく見守るまなざし”に変わり、“首を傾けられること”が“障害の理解”へと進んでいく¹⁰⁾とあるように、普段からその子どもに接していない人々には特有の行動をその子なりの1つの表現方法であることを理解するのは難しい。そのため、外出時などに非難の言動や視線が向けられることもあり、母親の悩みにつながっているのではないかと考えられる。

4. しつけへの葛藤

子ども特有の癖があったり、介助が必要な生活をしたりしている場合、親の判断で「どこまで我慢させてよいかかわからない」うえに、「わがままが障がいに由来するものなかわからない」「子どもの能力として、可能か不可能かの判断が難しい」とあるように、子どもの能力を的確に判断することが難しく、どこまでしつけとして行ってよいものか悩んでいるものと考えられる。

慢性的な病気を持つ子どもの場合も同様で、看護師として働いていた際、疾患が原因でできないのかそうでないのか、例えば甘えや怠惰であるのか、の判断が難しかったり、症状悪化や不機嫌を恐れて介助者が介助しすぎてしまったりする場面も多くあった。病状は一人一人違うのでその子に合った育て方を考えないといけない、常にその子が今どこまでのことができるのかを考えながら、その少し上に目標を設定して育ててあげるとその子の持つ能力を十分にひきだしてあげることができる¹¹⁾と述

べられているように、最終的には個々に判断していく必要があり、深い悩みの原因となっていると考えられた。

5. しつけへの疑念

しつけを難しいと感じ、戸惑いや葛藤を抱えながら、試行錯誤している母親にとっては、「知的障害の子どもにしつけが必要なかわからない」と、しつけをすること自体必要なのだろうかという疑問を持っている。

今回、学校の種別は知的障害49.8%・知的障害・肢体不自由併設32.6%であり、知的障がいのある子どもが多い。しつけの目標は大人の行動基準を子どもに内面化させること⁶⁾とあり、子どもは、しつけを必要とする日常的な個々のエピソードで、親から指示や統制、方向づけ、説明などを受けながら、基準の内面化や行動の自己制御機能を発達させる⁷⁾とある。しかし、このように指示・統制・方向づけ・説明を行っても、言葉の意味が理解できない、意思疎通ができない、人の表情や感情を読み取るのが苦手という発達状況においては、それは難しく、しつけの効果を確認できる経験も少ないため、しつけそのものの必要性を疑問視することにつながっていると考えられた。

VII 結語

特別支援学校に在籍する子どもの母親のしつけの悩みとして、5つの項目が明らかになった(図1)。

障がいのある子どもを持つ母親は、コミュニケーションがとれないことでしつけへの困難感や無力感を感じたり、わがままが障がいに由来するものであるのかわからないと感じたり、どこまでしつけを行えばよいのか葛藤している。しつけそのものの困難さと逆効果の出現が、しつけに対する困惑や葛藤につながり、また障がいのある子どもにもしつけをするべきかどうか、しつけそのものの必要性に悩むことにつながっていると考えられた。

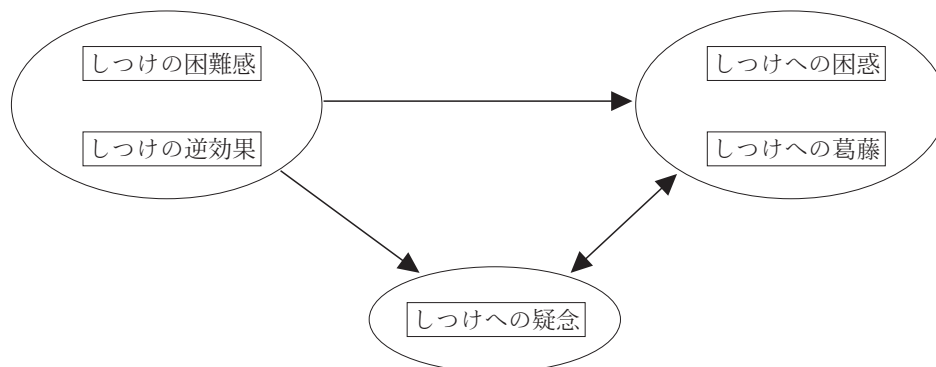


図1 特別支援学校に在籍する子どもの母親のしつけの悩み

VIII おわりに

障がいのある子どもの母親は、しつけに対し様々な悩みを持ちながら、日々子どもと接し育児を行っていた。今後、障がいのある子どもやその家族に関わる際には、しつけの方法も含めた育児支援を心がける必要があると思われた。

引用文献

- 1) 海津敦子：しつけ 連載こんなとき、どうする—障害児を育てる親たちへ—③, そだちの科学3 (10), 127-134, 日本評論社, 2004.
- 2) 前掲書1)
- 3) 杉原一昭：しつけで「あせり」を感じたとき, 児童心理767, 40-45, 金子書房, 2002.

4) 前掲書 1)

5) 寺町紳二：病気を持つ子へのしつけと保健養育指導，こどもケア2 (2)，69-76，日総研，2007.

6) 氏家達夫：発達段階を知ってしつけ上手になる，児童心理767，2-12，金子書房，2002.

7) 前掲書 6)

参考文献

- ・小此木啓吾：母親に語る「しつけ」の精神分析 幼稚園児・小学生の間に身につけてほしい心，第4刷，金子書房，2001.
- ・桜井茂男：子どもにとって生活習慣とは何か，児童心理 810，2-11，金子書房，2004.
- ・菅原健介：マナーのしつけはなぜ必要か，児童心理 791，2-11，金子書房，2003.

